

【論 説】

ハイエクの科学観と科学主義的取り組み批判

川 村 哲 章

目 次

1. はじめに
2. ハイエクにとっての科学
3. 科学主義的取り組みの批判のため基準となる視点
4. 科学主義的取り組みに対する批判
 - (1)「科学主義的取り組みにおける客観主義」の批判
 - (2)「科学主義的取り組みにおける集団主義」の批判
 - (3)「科学主義的取り組みにおける歴史主義」の批判
5. 理論について

1. はじめに

ハイエクは、自由主義の経済学者を代表する人物であり、ごく若い時を除いて、一貫して社会主義に対する批判を続けた。それは、主に方法論上の問題に関連してなされた。『科学による反革命』⁽¹⁾では、科学主義的取り組みとして、『法と立法と自由』⁽²⁾では、設計主義として捉えられていた方法論上のある態度が、社会主義の計画経済につながるものとして批判の対象であった。

この論説では、ハイエクの科学主義的取り組みに対する批判を見ていきながら、ハイエクの自身の社会科学の方法論を明らかにしていきたい。ハイエクの思想を理解するにあたり、その方法論に注目することは、非常に重要である。ハイエクの『自由の条件』⁽³⁾や『法と立法と自由』のような代表的な論説においては、自身の思想が社会科学の方法論とともに語られるところが頻繁にみられる。さらに言えば、それらが方法論上、自身が反対するものへの批判とともに

に語られているのである。

ハイエクは、科学主義的取り組みを批判しているが、もちろん科学を批判しているわけではなく、科学のあるべき正しい姿を模索している。以下、まずは、ハイエクが考える科学とは何か見ていきたい。

2. ハイエクにとっての科学

ハイエクにとって科学とは、「われわれの感覚的性質によって表される分類の体系を打ち壊し取り換える」⁽⁴⁾ことである。それは、様々な事象について、系統的な検討によって、同一と思われる事象が実は異なるものとわかったり、異なると思われる事象が同一のものであるとわかったりして、それに応じた分類の体系を作り上げていくことである。一定の重さと感触はあるが味や匂いのない、ある白い粉末⁽⁵⁾は、それだけ見たならば過去に経験としてふれた白い粉末と同一のものと考えられるであろう。しかし、様々な状況での系統的な検討によって、それと同一かどうか特定されていくであろう。また、感覚的性質という面を強調して言えばさらに、一定の光の下やある薬を服用した後で見る青い物は、別の状況下で見る緑のものと同じであったり、楕円形に見えるものが異なった視角からだと円形に見えたり、また物体の状況でいえば、水と氷などのように異なって見える現象が「実際には」同じ「物」であるといった例もある⁽⁶⁾。

そして、近代科学の全歴史は、「外部世界の刺戟の生得的な分類からわれわれが解放される進歩の過程」⁽⁷⁾として捉えられ、これらの刺戟は究極的には完全に姿を消し、要素間の関係の複合状態を記述するところまで発展してきたという。つまりハイエクにとっては、科学とは、感覚的性質によって分類されるものを実験その他の系統的な検討によって相互の関係によって要素による記述に置換していくことである。このような科学観を基本的なものと捉えておこう。

3. 科学主義的取り組みの批判のため基準となる視点

さて、社会主義を批判するハイエクにとって、それにつながる設計主義は批判されるべきものであり、その設計主義は、『科学による反革命』では「科学主義的取り組み」として捉えられていた。「科学主義的取り組み」⁽⁸⁾とは、基本的には、社会科学の分野に物理科学の特徴的方法を無批判に持ち込もうとする取り組みのことである。

ハイエクは、科学主義的取り組みについて、「客観主義」、「集団主義」、「歴史主義」という標題をあげて、それらを自身の主張する「主観主義」、「個人主義」、社会研究における発展した学問分野の特性との相違を明らかにしながら、批判的に説明している。論点は、多岐にわたっており、これらを検討することでハイエクの方法論に対する理解は深まると思われるが、ここで理解をさらに深めるための道具としてある視点を上げようと思う。科学主義的取り組みに対する批判から自身の主張に至り、さらには自生的秩序の説明につながるような視点である。これは、ハイエクの『科学による反革命』よりも後の「説明の程度について」⁽⁹⁾や「複雑現象の理論」⁽¹⁰⁾において明確になってきた論点であるが、これを科学主義的取り組みに対する批判の一部として読むことでより批判の意味も明らかになるとと思われる。事象の説明において、方法論上の誤りにつながるか否かの基準となるような根本的な考え方とは、次の2つの点である。

- ・事象を形成する要素のはじめの位置をすべて特定できるか。
- ・事象を形成する要素の働き方をすべて理解し得るか。

ハイエクは、自然科学を特徴づけて、「異なる種類の有意に相関する変数の総数が十分少ないので、あたかもそれらすべての決定要因を観察したりコントロールしたりできる閉鎖システムを形成している、と想定して研究が可能になる場合」⁽¹¹⁾と述べている。また、自然科学と社会科学の違いを複雑性の程度に注目しているところでは以下のように述べる。

「さまざまな種類の抽象的パターンの複雑性の程度を測定する容易で適切なやり方が存在するように思われる。問題となるパターンのクラスの特徴的な属性を示すのになくてはならない、パターンの実例を構成する要素の最小個数こそが、曖昧でない基準を提供するように思われるのである。」⁽¹²⁾

先にあげた要素の初めの位置が特定できるかどうかということは、変数の数や複雑さとして表現されるものによって決定される。物理学に代表される自然科学においては、事象を形成すると思われる相関する変数の数が少なく、条件を整えて実験などによって観察したりコントロールできるということである。

この言明は、『説明の程度について』や『複雑現象の理論』で、物理学の特徴としてなされ、そうでない事象としての社会現象には当てはまらない、また、社会現象には社会現象特有の事象のあり方があり、それに即して、物理学とは違った、意味ある方法があるという主張につながっていく。この言明は、『科学による反革命』の後、ハイエクが自身の科学論を発展させていく中で徐々に明確になっていったように思われるものである。

4. 科学主義的取り組みに対する批判

ここでは、ハイエクが『科学による反革命』でおこなった「科学主義的取り組みにおける客観主義」同じく「集団主義」、さらに「歴史主義」の批判について、上述の視点を含めて考察してみたい。そうすることで、これらの批判の意味が明らかになり、ハイエク自身の方法論についての理解も進むと思われる。

(1) 「科学主義的取り組みにおける客観主義」の批判

科学主義的取り組みにおける客観主義に対するハイエクの批判は、精神的実在に対してどのような態度をとるのかを巡って行われる。

行動主義者あるいは物理主義者に対しては、彼らが自身の主張に反して、精神的実在を観察することを研究のはじめに安易に取り入れていることを批判す

る⁽¹³⁾。物理的性質を少しも共有しない物理的事実から同一の対象または同一の行為としてわれわれは無意識のうちに分類している。例えば、「友好的な顔付き」、「脅迫的な身振り」などである。さらに、われわれが他の人びとと同じく直ちに同一の物と考えて取り扱うさまざまな現象の範囲は、正確に規定できない⁽¹⁴⁾。われわれには、他の人びとの行為を語るときに用いる精神的カテゴリーがあり、それらによって精神的実在を生み出している。

批判のための視点としてあげていたものの一つ目「事象を形成する要素のはじめの位置をすべて特定できるか」について考えてみよう。事象を形成する要素のはじめの位置を特定するために、いくつかの事象を分類し、同一のものともみなす必要がある。しかし、社会科学の課題とする事象は、主観による分類が大きな意味を持ち、物理的属性にとどまらず、正確に規定できず、それは不可能となる。行動主義者や物理主義者はこれを可能なものとして規定している。

行動主義者あるいは物理主義者は、精神的実在のような主観的知識を用いることを批判している。ハイエクは、それならば、彼らは似ているように思われるものが、他の人にもそう思われるだろうと安易に仮定して、例えばある赤い円を見せたり、ある特定のメロディーを聴かせてその反応を観察することから研究を始めるべきではなく、純粹に物理的な事象、例えば特定の波長をもった光の波に対する反応などから研究すべきであると、主張する⁽¹⁵⁾。さらに、精神的実在の形成や精神的実在とそれが表現している物理的事実との関係の説明は、たとえ仮にそれがなされたとしても社会科学の課題ではない、また、その説明は原理の説明以上のものではないだろうとも語る。

続いて、科学主義的取り組みにおける客観主義として、ハイエクが批判の対象とするのは、質的現象をすべて無視して量的側面、計量可能な事柄に専心する試みである。エルネスト・ソルヴェー、ヴィルヘルム・オストヴァルト、F・ソディーらの社会「エネルギー論」⁽¹⁶⁾について言及している。これは、すべてのものが究極的にエネルギーの量に還元できることから、事物を互換可能な抽象的エネルギーの単位として取り扱おうとするものだが、この傾向をハイエクは、一種の超意識またはある種の絶対的知識を授けられた研究者が抱く性向

だとして批判する。

このような傾向の例としてハイエクは、「あまり洗練されてはいないが、それでいてもっと広く知られているものに生産の『客観的』可能性の概念または物理的事実を想定することによって得られる社会的産出量の概念」⁽¹⁷⁾をあげている。この考え方は、「仮に多くの人々の間に分散しているあらゆる知識がある単独の意識によって習得でき、そして仮にこれらの知識を習得した意識が自ら欲するときには何時でもすべての人びとを行動に駆り立てることができるとしたら、そこから幾つかの成果が得られに違いない」⁽¹⁸⁾と想定されている。ここで問題となっているのは、経済活動を可能にする市場における知識のあり方である。基準としてあげてきた「事象を形成する要素のはじめの位置をすべて特定できるか」ということを知識のあり方に応用したものとしてハイエクの以下の言明を読むことができるだろう。

与件と見なされる唯一の事実は、特定のものを特定の目的のために使用する方法に関して幾つかの知識をもった特定の人びとが存在しているということである。この知識はけっして統合された全体として存在もしなければ、単一の意識の中にも存在しない。如何なる意味でも存在しうると言える唯一の知識は、これらの単独の、しばしば一貫しない、そして対立さえするさまざまな人々の見解なのである⁽¹⁹⁾。

ハイエクのこの知識のあり方の見解は、随所で繰り返し主張されており、自生的秩序を語る議論にもつながるものである。「主観主義」として主張されているものであるが、ハイエクの客観主義の取り組みに対する批判を見ることでより明確になったと思われる。

(2) 「科学的主義的取り組みにおける集団主義」の批判

ここで言う「科学的主義的取り組みにおける集団主義」とは、「社会」とか「経済」、「資本主義」（ある与えられた段階としての）、ある特定の「産業」、「階級」、「国」といった「全体」を明確に与えられた対象として取り扱い、これらの動きを全体として考察することによってそこに幾つかの法則を発見できるというものの

ことである。

社会科学の専門的な主観主義者の取り組みは、社会複合体の内部に関する知識、あるいは構成体の要素を形づくっている個々人の態度に関する知識から出発するのに対し、前述したように科学主義的取り組みにおける客観主義は、これらの社会構成体を外部から眺めようとする。社会現象をあたかも全体として直接認識されうる対象であるかのように取り扱う。

自然科学者が社会分野について研究しようとするときよくこの態度を取りがちである。自然の研究におけるのと同じように、関連した複合現象の中の経験的規則性を探し求める。個人の行動においては、自然科学でしていたような客観的なやり方では、規則性がほとんど確定されえないことから、今度は全体に眼を向け、規則性を得ようとする。「科学主義的取り組みにおける集団主義」は、「客観主義」から生まれてくるのである。

ハイエクは、「集団主義」は、以下のようにして進められると考える⁽²⁰⁾。「社会現象」を自然現象を観察するように、直接観察するところからはじめるべきという考えがあり、「社会」とか「経済」といった用語が通俗的に使用されてきたので、これらに対応する一定の対象があるように考える。そして、このような一般の人々が意識の中で構成した、仮の理論とかモデルに過ぎないものを事実と取り違えるのである。

このような素朴な実在論は、社会現象に関する思想に深く入り込んでいる。このような全体は、決して観察によって得られるものではない、われわれの意識の産物である。「与えられた事実」でも物理的属性によって測られた客観的データでもない。観察されうる、ある多くの個々の事実の結びつきを示す一つの精神的構造である。もちろん（花とか蝶、鉱物とか光線、森とか蟻塚のような）「自然的単位」として与えられたものでもない。

ハイエクは、「主観主義」から「全体」について以下のように説明する⁽²¹⁾。同一の集合あるいは同一の全体としてグループ分けされるものは、個々の事象のさまざまな複合体で、ある類似した仕方でも相互に関連し合っていると信じられているものである。これらの事象は、これらを統一する理論に基づいた複合

的心像の幾つかの要素の中から選択されたものである。

ハイエクは、これに続けてこのようにして捉えられる「全体」について「秩序」という言葉を使って言及している。『法と立法と自由』で明確に語られる自生的秩序につながる説明が『科学による反革命』で語られているところである。以下のように言う。

これらの事物は、これらを統一する理論に基づいた複合的心像の幾つかの要素の中から選択されたものなのである。（もしも「事物」という用語が何か物質的あるいは具体的な物という意味で理解されたとしたら）これらの事物は明確な事物の集まりを表すものではなく、様々な事物が相互に関連し合う一つの型、あるいは秩序を表している。——秩序と言ってもそれは空間とか時間の秩序のことではなく、理解されうる人間的態度を表す諸関係によってのみ規定されうるものなのである⁽²²⁾。

このモデルはわれわれが実生活の中で常に同時に観察している多くの現象の幾つかの関係の構造を再構成する。このことは、社会全体についての通俗的概念にも当てはまるものである⁽²³⁾。社会科学の役割は、この通俗的概念を洗練されたものに取りかえていくことである。「市場」とか「資本」のように通俗的概念と理論的目的を基にして形成されている概念がある程度対応している場合もある。

例えば、「価格体系」の動きを全体として述べる場合は、明確に与えられた全体にわたった言及することはない。できるのは、多くの個人の初期変化の対応とその直接的結果を追求することによって全体を再構成することだけである。これらの変化を物理的的属性によっては規定できないので観察することは不可能である。基準としてあげてきた「事象を形成する要素のはじめの位置をすべて特定できるか」という点からすると、不可能である。全体の再構成は、事物に対する態度の中から幾つかの関連する側面を選び出し作り上げてきたモデルの助けを借りることによってなされるのである。

科学主義的取り組みにおける集団主義は、上のように構成される「全体」を個人的意識と何か同種のもので漠然と考え、扱うことになるのであるが、これは擬人観の概念にもつながる。ハイエクは、オーギュストコントが人類を一種の超人格たる一つの「社会的存在」として扱ったことを指摘する。このような取り組みは、現代においてもみられる⁽²⁴⁾。「集団主義」は、社会現象にもっと別な違った意味を付与された全体と見なすのである。

ハイエクは、社会現象を「全体」から把握しようとする、遠距離から包括的視野を得ようとする願望からもたらされる態度についても批判する⁽²⁵⁾。ある遠くの天体からの観察者とか望遠鏡的視野と呼びえるような、「巨視的視野」を得ようとするものである。これらは、事象の全体を視野におさめ、恒常的な布置や規則性を見ようとして観察する態度であるが、まさに基準としてあげてきた事象を形成する要素のはじめの位置をすべて特定し、事象を形成する要素の働き方をすべて理解しようとする態度を端的に表したものである。このような総体的視野から得られるものは、物理的対象だけである。そしてそれらを規定するものは、物理的属性に限られる。この観察者が見るのは、物理的属性が同じものに対して異なった反応を示す人々であり、物理的属性が異なるものに対して同じ反応を示す人々であろう。「客観主義」で批判されたことが、ここでもあらわれてくるのである。

ハイエクの批判は、「全体」にかかわって、統計的集団を扱う手法、統計学についても向けられる⁽²⁶⁾。ハイエクによると、統計学は、個体の属性の体系的結合を必要としない。むしろ、個々の要素間の関係を故意に、そして系統的に無視しているとする。統計学は、「集団」の要素の特性を問題にするが、特定の要素の特性は問題にせず、ある特性をもった要素が総体中であらわれる頻度を問題にする。この結果、これらの要素の特性と、これらの要素が相互に関連し合っているさまざまな仕方との間に体系的な結びつきはないと仮定していることになり、理論的な社会科学が問題にするような構造は事実上失われているとする⁽²⁷⁾。統計については、上述の議論から、狭義の統計の科学と統計という用語を混同してはならず、貿易統計、物価変動指数および大部分の「時

系列」あるいは「国民所得」統計などは、大量現象の探求に用いられる特有の手法が適用されうるようなデータではなく、「計量」に過ぎないという⁽²⁸⁾。そして、これらが役立つというのではなく、ある特定の時点に存在する条件に関する情報、ある特定の状況に関する歴史的情報のひとつの事例として何らかの実際利用のために適用できるかもしれない。しかしながら、作成された特定の場所と時間を超えて何か意味のあることを解明してくれるものとして、つまりハイエクの考える社会科学が扱う規則性の発見に役立つものとしては、扱うことができないとして批判するのである。

(3) 「科学主義的取り組みにおける歴史主義」の批判

「科学主義的取り組みにおける歴史主義」の批判に移ろう。ハイエクは、歴史主義を古いものと新しいものの二つに分ける。古い方は、「あらゆる歴史現象は唯一、または独特の（個性的な）性格を持っていて、それらは長期間にわたって働く結合の結果として発生論的にのみ理解されうる」⁽²⁹⁾とする考え方があり、そこには、「構成的」理解が事実上含まれている。この考え方は、歴史学派として捉えられる。

ここでの議論は、主に「理論」と「歴史」をめぐる考察である。ここでの理論とは、「社会全体の構造的統一性の原理に関するある理解」⁽³⁰⁾のことである。一回限りの独特な性格を持つ歴史に対置される。

古い歴史学派は、理論化することを嫌ったため、自然の研究は理論的取り扱いをし、社会現象の研究に固有の方法は、歴史的取り扱いをすべきとの信念が生まれた。しかし、新しい歴史主義は、科学的潮流のもと、歴史を社会についての経験的研究として説明するに至り、結局、理論化が行われるようになった。

ハイエクは、歴史的取り扱いと理論的取り扱いの区別について、この区別の本性について理解し、自然であれ、社会であれ、何らかの具体的現象を理解するには、どちらの知識も等しく要求されることを主張する⁽³¹⁾。

ある具体的現象を説明するどんな試みについても、ある十分な数の側面を考

慮に入れることから始められる。ハイエクがあげる例は、自分の菜園が次第に雑草で覆われる過程⁽³²⁾を記録する場合である。この過程の記録は、その細部に至るまで独特なものである。つまり歴史的取り扱いとして考えられる。しかし、この菜園の土壌の分布、日照や湿度、通風その他の相違について考察し、説明するためには特定の事実とは別に、物理学、化学、生物学その他の理論の多様な一部を用いることになる。これによって、この菜園が次第に雑草に覆われる過程という現象の説明がされるが、これを理論ということはない。しかし、地理学、地質学、天文学の大部分は、特に地球の状態が問題とされる。理論科学を一般的規則の体系とするならば、これらの学問は、理論的科学ではないとも言い得る。

このように、発生原理の追究と具体的説明との区別は、自然の研究と社会の研究の区別と結びつかない。どちらの分野も具体的で独特な事象を説明するには、一般化が必要であり、特定の現象の説明は、一般的規則の存在を前提としている。

そして、自然科学では一般規則に重きが置かれるのに対し、社会現象においては特定の、そして独特の状況が重要である。特定の出来事が重要になるのは、われわれの生活している特定の環境を創り出す一因となっているからである。

独特な、一回限りの研究対象の論理的性質について考えよう。ここには、ある特定の総体が一つの単独の対象になりうると考える誤解がある。基準としてあげてきた事象を形成する要素のはじめの位置をすべて特定できるかということからも問題がある。

考えるべきは、あらゆる思惟は、厳密に言って何らかの程度、抽象的であるということである。実在についての知覚は、幾つかの諸特性に基づいた分類をともなっている。ある現象は、さまざまな側面を持つものとして取り扱われる。このことは、自然に関する理論科学にもあてはまる。同一の物が一つの科学にとっては振り子であり、他の科学にとっては真鍮の塊であり、第三の科学にとっては、凸面鏡ということになる⁽³³⁾。

現象の限りない多様性に対して、科学が行う選択には、一般的な適応性をも

った規則性を打ち立てるためでなく、世界に存在する特定の問題に関連した特徴を選択することが必要とされる。科学者があたかも全体の状態を語る場合があるが、関連している幾つの特徴を言っているにすぎない。問われる問題に応じて選択された側面であることをしらなければならない。

ハイエクは、このことは、歴史的現象について考察する際にも当てはまるとする⁽³⁴⁾。一つの歴史的過程とか時代は、思惟の単一明確な対象ではなく、問われる問題によってそうなるのである。ここで考えねばならないのは、歴史家が研究する「全体」の本性についてである。歴史家が研究する全体について、幾つかの選ばれた構成要素にすぎないのであって、歴史家に全体として与えられることはない。選ばれた要素間の推論しうる関係の体系について述べているのである。「政府」とか「貿易」、「軍隊」、「見聞」といった言葉は、観察されるものを表しているのではなく、要素間の関係を表した一貫した体系である。これを「理論」ということができる。ハイエクは言う。

これらの全体は、要素間の関係を再構成する知的な働きによって存在しうるものであり、一般化は歴史にかかわる具体的全体やそれらの要素の特殊な布置に言及することはないし、言及することもできない⁽³⁵⁾。

「具体的全体やそれらの要素の特殊な布置に言及することはない」という言明について、基準としてあげてきた、事象を形成する要素のはじめの位置をすべて特定できるか否かが問題となる。歴史にかかわる具体的全体について、はじめの位置を特定することは不可能である。かくして、理論によって一般化されるような所与の要素ではなく、理論的活動の結果、使用しうるモデルが作られるのである。モデルは一種類の要素から成り立っているということが出来る。要素の結びつきが一貫した原理体系によって説明されるからである。

社会現象の歴史的研究が理論に依拠しているということが、知られていないのは、理論的推論を歴史が用いていることが殆ど知られてこなかったのと、歴史家が適用する理論的図式が持っている単純さによる⁽³⁶⁾。歴史家が研究する独特な歴史対象は、諸関係の恒常的な様式か、一般的な性質をもった構成要素からなり、繰り返される過程でこの中で行為する個人の意図を理解することで、

これらの構造を把握する。事象を形成する要素のはじめの位置をすべて特定できるか否かという観点からすると、歴史家の研究する全体は、個体として与えられているものでも自然的単位として与えられているものでもなく、理論的作業によって作られた構成体にすぎないことを把握しておこう。

ある特定の制度がいかに発生したかについての発生論的説明であれ、その制度がいかに機能したかについての記述的説明であれ、構成する要素の一連の包括的考察を適用しなければ説明はできない。理論的作業（理論によってモデルをつくる）と歴史的作業は補完的な行為である、というのがハイエクの主張である。

「科学主義的取り組みにおける歴史主義」は、このような見解を取らないからこそ批判の対象となる。歴史によって研究される複合体を与えられた全体と見なす素朴な見解から、全体に観察を通じてこれら全体の発展「法則」を解明できるという信念が自ずと導き出されてきたのである。歴史主義の名の下に歴史理論または「歴史哲学」のための経験的基礎を見出す試み、歴史的発展の中で次々と跡づけられる明確な「段階」とか「制度」とか型の必然的変遷を確認する試みがなされた。歴史主義は、全体の理解を助け、周知の要素の結びつきを示し、そして、全体についての理解を深めうる理論というものの可能性を否定する。部分から全体を再構成する手続きが逆転させられ、構成要素が全体によって理解されるということになった⁽³⁷⁾。

ハイエクが正しいとする歴史に対する態度は、直接知られる要素から世界の中に見出される複雑で独特な構造を再構成し、要素間の関係の変化を通して全体の変化を追究することである。このような地味な課題に辛抱強く取り組むことであった。しかし、ハイエクは、えせ歴史の著述家たちが、一種の精神的近道を通して、直観的に悟られた全体が変遷していく法則を直接洞察できるつもりでいると言って批判する⁽³⁸⁾。批判の対象は、ヘーゲル、コント、マルクス、ゾ・バルト、シュベングレーなど⁽³⁹⁾である。

自然科学によって生み出された法則の類にこれらの理論は似ていた。あらゆる知的努力が、自然科学を基準によって測られるという風潮があり、将来の発

展を予言しうると見られた歴史理論は、科学的性格を証明するものとみなされた。マルクス主義は 19 世紀特有のこの種の数多くの産物の一つに過ぎなかった。これらの思想は、既存の理論については、負の影響をもたらした。これらの思想は、以下のように言明する。社会現象の全体は、直接観察できる。そして、全体に含まれるすべての事物は、必然的に全体とともに変化しなければならない。さらに、全体を作り上げている要素を特定の時代と無関係に一般化することはできないし、これらの要素が全体と結びつく仕方にかんするいかなる普遍的理論もあり得ない。

これらの言明は、事象を形成する要素のはじめの位置をすべて特定できるとしている。全体をはじめに捉えられるとし、そこから個を捉えるという順番である。さらに個別的現象の概念は、歴史的カテゴリーと見なされるべきで、それはある特定の歴史的文脈の中でのみ、確実な根拠を持つとされた。これによれば、12 世紀の価格とか、紀元前 400 年のエジプトの独占とかは、今日の価格や独占と同じ「物」ではない⁽⁴⁰⁾。

しかしながら、これはハイエクによれば、理論の役割について完全な思い違いをしている。ある特定の日時に特定の価格がつけられた理由について十分に解答することはできないが、だからといって今日と同様の理論的推理を働かしてはならないということにはならない。「価格」とか「独占」は、人間の特定の関係によってのみ、定義されうる対象である。それ以外の属性を持つことはできない。

ハイエクが、社会科学の方法として、われわれには馴染み深い、物理的用語によっては定義できない精神的カテゴリーの中にこれらの行為を位置づけるのに対して、新しい「歴史主義」は、個人の行為について、特定の物質的な物やその他をそのまま受け取ることによって、これらの行為が物理的事実以外の何物でもないとする。これは、われわれが過去の事実を全く知り得ないということ、物理的事実以外の史料についてわれわれは意識が異なっているので全く理解できないということを意味する。

歴史主義を首尾一貫させると次のような見解に帰結していく。人間の意識そ

のものが変化する。そして、人間の意識の大部分の表示、またはすべての表示はその歴史的背景から切り離しては理解できない。また、全体の移り変わりの法則は、学べるし、これらの法則の知識によって如何なる特殊な人間意識の表れも理解しうる。

ハイエクは、このように新しい歴史主義が帰結していくことを分析して、新しい歴史主義は、「同一の要素の異なった配置によって、全く異なった複合体が生み出されるゆえんを知り得ない」⁽⁴¹⁾と語り、新しい歴史主義は、社会構造の変化の原因を人間意識そのものの変化の中に求めねばならなかったとした。特定の時代や地域によって、人間の優勢な型が異なっていることは、十分に認められることだが、人間意識の全体的認識に向けて、一定不変の特徴が示されているということは変わらないのである。

ハイエクの新しい歴史主義の批判から、社会科学の方法に関連して、人間意識、人間精神に対するハイエクの基本的な態度を知ることができる。ハイエクによれば、われわれは、われわれ自身の意識との類比でうまく解釈でき、観察される事柄については、われわれ自身の思惟の周知のカテゴリーを適用することによって十分納得のいく説明ができるということ、また、意識のようなものを認識するには、われわれ自身の意識に類似したものとして認識しなければならないということを基本的な態度としなければならない。つまり、認識される可能性のある意識は、われわれ自身の意識に類似したものに限られるのである⁽⁴²⁾。

5. 理論について

以上、ハイエクの科学主義的取り組みにおける「客観主義」、「集団主義」、「歴史主義」に対する批判を見てきた。最初にあげた基準としての「事象を形成する要素のはじめの位置をすべて特定できるか」、「事象を形成する要素の働き方をすべて理解し得るか」は、科学主義的取り組みが、それが不可能なところではなし得るとしている点が明らかになった。「客観主義」では、主観的に捉えられる事物を物理学と同様、客観的に捉えようとする態度に対して、「集団主義」

では、秩序として捉えられるべき全体を「与えられた」全体として捉えようとする態度に対して、「歴史主義」では、人間意識の変化について内部からしか見られないものを外部から観察し、彼らにとっては存在しないことから一般理論を否定する態度に対して、それぞれ批判が加えられた。

この中で重要なものとして浮かび上がってきたのが、「理論」である。理論についての言及は、「集団主義」を批判する中で、社会科学は「与えられた」全体を扱うのではなく、周知の要素に基づいてモデルを構築し、これらを理論によって全体を構築するとされた。また、「歴史主義」の批判では、「歴史主義」が、人間意識が変化するとすることから理論の存在を否定するのであるが、ハイエクは、まさしくその理論によって、対象となる時代の人間の意識を類比することによって解釈できることを主張したのであった。

ハイエクは、『法と立法と自由』において、科学主義的取り組みと親和的な設計主義について批判している。デカルト派の設計主義の特徴的な考え方は、理性を明示的な前提からの論理的演繹をする働きととらえるものである。そして合理的な行為とはこの論理的な演繹によるものであり、それによって有用な制度や実践が生まれると考えるのであった。ハイエクは、「社会科学にとっての事実」で社会科学の方法を説明して、「我々は、我々自身の知性の持つ知識から「先験的」、「演繹的」、もしくは「分析的」な方式ですべて理解しうる行動の網羅的な分類を（少なくともは原理的には）引き出しうる」⁽⁴³⁾としているが、この「演繹的」な方式とデカルト派の論理的演繹は何が相違しているのだろうか。それは、ここまでの考察でふれてきた「事象を形成する要素のはじめの位置をすべて特定できるか」、「事象を形成する要素の働き方をすべて理解し得るか」という論点における相違に他ならない。デカルト派の論理的な演繹が、「言葉で表現でき、したがって三段論法の明示的前提をなしうる知識」⁽⁴⁴⁾に、つまり「事象を形成する要素のはじめの位置をすべて特定」された知識に基づくのに対し、ハイエクの「演繹的」方式とは、科学主義的取り組みにおける歴史主義を批判する中で見られたような、「直接知られる要素から世界の中に見出される複雑で独特な構造を再構成し、要素間の関係の変化を通して全体の変

化を追究するといった、地味な課題に辛抱強く取り組む⁽⁴⁵⁾態度のことである。ハイエクは、このようにして自身の考える理論について主張するとともに、科学主義的取り組みや設計主義を批判し続けたのであった。

注

- (1) Hayek, F. A., *The Counter-Revolution of Science: Studies on the abuse of reason*, Glencoe (The Free Press) 1952〔佐藤茂行訳『科学による反革命』木鐸社, 1979年〕
- (2) Hayek, F. A., *Law, Legislation and Liberty*, volume 1: Rules and Order (1973); volume 2: The Mirage of Social Justice (1976); volume 3: The Political Order of a Free People (1979), Routledge & Kegan Paul (London and Henry)〔矢島鈞二/水吉俊彦訳 ハイエク全集第1期第8巻『法と立法と自由——「ルールと秩序」』(1987年), 篠塚慎吾訳 同第9巻「社会正義の幻想」(1987年), 渡辺茂訳 同第10巻「自由人の政治的秩序」(1988年)春秋社〕
- (3) Hayek, F. A., *The Constitution of Liberty*, Routledge & Kegan Paul (London), 1960〔気賀健三/古賀勝次郎訳 ハイエク全集第1期第5巻『自由の条件』「自由の価値」(1986年), 同第6巻「自由と法」(1987年), 同第7巻「福祉国家における自由」(1987年)春秋社〕
- (4) Hayek, F. A., *The Counter-Revolution of Science: Studies on the abuse of reason*, Glencoe (The Free Press) 1952, p.31〔佐藤茂行訳『科学による反革命』木鐸社, 1979年, 12ページ〕
- (5) *Ibid.*, p.32〔同上書12ページ〕
- (6) *Ibid.*, p.32〔同上書13ページ〕ハイエクは、『感覚秩序』では次のように述べている。「現象的秩序と物理的秩序の区別を、そのどちらにしても、普通の言葉でいう「現実の」世界との区別と混同しないことが大切である。われわれが問題とする対比は、「外見」と「実際」との間ではなくて、事象の相互作用の違いと事象がわれわれに与える効果の違いとを比べてみることである。この問題を検討しなければならぬ場合に、「現実的」という言葉がはっきりした意味をもっているかどうかは疑わしい」Hayek, F. A., *The Sensory Order — An Inquiry into the Foundation of Theoretical Psychology*, London, Routledge & Kegan Paul Limited, 1952, p.4〔繩山貞登訳『感覚秩序』ハイエク全集第1期第4巻, 春秋社, 1989年, 12ページ〕
- (7) Hayek, F. A., *The Counter-Revolution of Science: Studies on the abuse of reason*,

Glencoe (The Free Press) 1952, p.33〔佐藤茂行訳『科学による反革命』木鐸社、1979年、13ページ〕

(8) *Ibid.*, p.78〔同上書 54 ページ〕

(9) Hayek, F. A., 'Degrees of Explanation', *Studies in Philosophy, Politics and Economics*, London and Chicago, 1967.〔望月由紀訳/嶋津格監訳「説明の程度について」ハイエク全集第Ⅱ期第4巻『哲学論集』, 春秋社, 2010年〕

(10) Hayek, F. A., 'The Theory of Complex Phenomena', *Studies in Philosophy, Politics and Economics*, London and Chicago, 1967.〔杉田秀一訳/嶋津格監訳「複雑現象の理論」ハイエク全集第Ⅱ期第4巻『哲学論集』, 春秋社, 2010年〕

(11) Hayek, F. A., 'Degrees of Explanation', *Studies in Philosophy, Politics and Economics*, London and Chicago, 1967, pp.3-4〔望月由紀訳/嶋津格監訳「説明の程度について」ハイエク全集第Ⅱ期第4巻『哲学論集』, 春秋社, 2010年, 93～94ページ〕

(12) Hayek, F. A., 'The Theory of Complex Phenomena', *Studies in Philosophy, Politics and Economics*, London and Chicago, 1967, p.25〔杉田秀一訳/嶋津格監訳「複雑現象の理論」ハイエク全集第Ⅱ期第4巻『哲学論集』, 春秋社, 2010年, 124ページ〕。

Ibid., p.26〔同上書 124 ページ〕「それぞれ異なる分野の構造体を特徴づけるパターンを再現するために（言いかえれば、そのような構造体の従う一般法則を示すために）定式またはモデルが持たなければならない異なる変数の最小個数、という角度からこの問題を検討するならば、生命のないものから、（「いっそう高度に組織された」）生命のあるもの、あるいは社会現象へと立ちいるにしたがって、複雑性が増大することは明白である」

Ibid., p.28〔同上書 127 ページ〕「本性上複雑である現象についての単純な理論（あるいは、こちらの表現の方が好ましいなら、より高度に組織された現象を扱わなければならない理論で単純なもの）はおそらく端的にいて、必然的に偽である。少なくとも「他の条件が等しければ」という仮定とその特定がないかぎり、そうである。」

Ibid., p.24〔同上書 123 ページ〕「予期されるパターンの具体的表現は、具体的な状況（「初期条件と境界条件」, この論文では「データと呼ぶ」）に依存している。」

(13) Hayek, F. A., *The Counter-Revolution of Science: Studies on the abuse of reason*, Glencoe (The Free Press) 1952, p.78〔佐藤茂行訳『科学による反革命』木鐸社、1979年、55ページ〕

(14) 「同一のものと考えて取り扱うさまざまな現象の範囲」について、例えば、あ

る一冊の本があってそれと同一の本とは何か、いくつか想定してみよう。これは、ハイエクが自身の認識論や意識的な過程を論じる際に言及する「同定」の問題にもかかわってくる。①目的 その本を読んで何らかの知識その他を得ることを目的とする場合。形状が違っていてもタイトルが同じであれば、同一の本と言い得る場合があるだろう。「内容からすれば同じ」と言う場合である。②形状 新品の本が2冊あってこれらの本を見比べて差がなければ形状から同一の本と言い得る場合である。③所有 たとえ形状が同一でも一冊を誰かが長く所有していればそれ以外のものを同一とは言い難い場合。形状は同一でも「これは私のもので、あなたのものとは違う」という場合である。④時間経過 一冊の本が同一の場所に保管されている場合。10年まえに保管したものが今ここにあれば同一の本と言うだろう。しかし、10年間に状態が大きく変わっていたならば「10年前の本とは異なる」とも言い得るだろう。

- (15) *Ibid.* [同上]
- (16) *Ibid.*, p.90 [同上書 64 ページ]
- (17) *Ibid.*, p.91 [同上書 64 ページ]
- (18) *Ibid.*, p.91 [同上書 65 ページ]
- (19) *Ibid.*, p.92 [同上書 65 ページ]
- (20) *Ibid.*, p.94 [同上書 70 ページ]
- (21) *Ibid.*, p.94 [同上書 72 ページ]
- (22) *Ibid.*, pp.94-95 [同上書 72 ページ] ハイエクは続けて以下のように述べる。「関係の特殊な結びつきに含まれている意味を追究することによってのみ研究されうる。換言すれば、われわれがいう全体なるものは、全体に含まれる諸部分の結びつきにかんして形づくられており、かつそれがもっぱらこれらの部分の関係に基づいて作り上げられたモデルの形で明確に述べられる場合に限って存在する。」
- (23) *Ibid.*, p.96 [同上書 73 ページ]
- (24) Stock, Gregory, *Metaman: The Merging of Humans and Machines into a Global Superorganism*, 1993 [林大訳『メタマン—人と機械の文明から地球的超有機体へ』白揚社 1995 年] など。
- (25) Hayek, F. A., *The Counter-Revolution of Science: Studies on the abuse of reason*, Glencoe (The Free Press) 1952, p.104 [佐藤茂行訳『科学による反革命』木鐸社, 1979 年, 77 ページ]
- (26) *Ibid.*, p.107 [同上書 80 ページ]

- (27) *Ibid.*, p.108 [同上書 81 ページ]
- (28) *Ibid.*, p.110 [同上書 82 ページ]
- (29) *Ibid.*, pp.112-113 [同上書 86 ページ]
- (30) *Ibid.*, p.113 [同上書 86 ページ]
- (31) *Ibid.*, p.115 [同上書 88 ページ]
- (32) *Ibid.*, p.115-116 [同上書 88 ページ]
- (33) *Ibid.*, p.120 [同上書 91 ページ]
- (34) *Ibid.*, p.124 [同上書 94 ページ]
- (35) *Ibid.*, p.125 [同上書 95 ページ]
- (36) *Ibid.*, p.126 [同上書 96 ページ]
- (37) *Ibid.*, p.129 [同上書 98 ページ]
- (38) *Ibid.*, p.129-130 [同上書 98 ページ]
- (39) *Ibid.*, p.130 [同上書 99 ページ]
- (40) *Ibid.*, p.131 [同上書 100 ページ]
- (41) *Ibid.*, p.134 [同上書 101 ~ 102 ページ]
- (42) *Ibid.*, p.139 [同上書 106 ページ]
- (43) Hayek, F. A., 'The Facts of the Social Sciences', *Individualism and Economic Order*, Routledge & Keagan Paul (London), 1949, p.68 [嘉治元郎 / 嘉治佐代訳「社会科学にとっての事実」ハイエク全集第 I 期第 3 卷『個人主義と経済秩序』, 春秋社, 1990 年, 94 ページ]
- (44) Hayek, F. A., *Law, Legislation and Liberty*, volume 1: Rules and Order (1973) , Routledge & Kegan Paul (London and Henry), p.11 [矢島鈞二 / 水吉俊彦訳ハイエク全集第 I 期第 8 卷『法と立法と自由——「ルールと秩序」』, 春秋社, 1987 年, 19 ページ]
- (45) Hayek, F. A., *The Counter-Revolution of Science: Studies on the abuse of reason*, Glencoe (The Free Press) 1952, p.129 [佐藤茂行訳『科学による反革命』木鐸社, 1979 年, 98 ページ]